『青空』同人のこと（その一）

――忽那吉之助（野村吉之助）――

唐井清六

一つの同人雑誌から一人の作家が誕生したら、その雑誌は大成功だったといってよい、とだれかが書いているのを読んだ覚えがある。それだけ文壇に登場するのは至難のわざというわけなのであろう。

大正末年から昭和のはじめにかけて刊行された『青空』からは、なん人もの小説家や詩人、評論家や翻訳家が巣立っていった。空前絶後といわれた同人雑誌時代にあって屈指のものといわれるゆえんである。

しかし終刊時には二十人をこえる同人を擁していた『青空』で、これら文壇にデビューしていった人たちの蔭の力になっていた、いわば土壌のような役割を果たしていた人たちの存在していたことは忘れてはならないだろう。

これから書いてゆくのは、そういう世間にあまり知られていない、もう一つの『青空』同人たちのプロフィールである。

梶井基次郎は大正十五年六月発行の『青空』（第十六号）の「同人印象記」で忽那吉之助を担当して次のように書きおこす。

≪忽那はクツナと読む。奇妙な名だ。こんな話がある。高等学校では彼も教場を下駄穿きで歩く方だった。独逸

人の教師が「何故下駄で教室へ入るのだ」と或日彼に云つた。「靴がないのです」そこでヘルフリッチュ先生が「道理でクツナ」≫（「忽那に就て」）

梶井のいうようにめずらしい苗字である。しかし伊予地方ではこの姓は比較的多いときく。瀬戸内海、松山の沖合に点在する忽那七島、その中でいちばん大きな島を中島といい村上水軍の本拠地であった。それが秀吉の四国征討によって亡ぼされ、対岸に逃れて移り住んだのがそもそもの先祖であったという。

忽那は明治三十六年六月八日、愛媛県温泉郡浅海村の造り酒屋の子供として生まれる。一人の姉と四人の兄をもつ六人きょうだいの末子であった。

≪私の生れた家は造り酒屋でだゝつ広いうす暗い家で私は育つた。無闇に土間が広く煤けた大きな柱があつた。酒蔵のいろりで、私の国では「おやじ」と呼ぶが毎年島から稼ぎにくる杜氏に酒の粕を焼いて貰つた。酒蔵の中に落ちて死んで居た大きな蛇を見たこと、後に投機好きの父が相場で財産をすつて仕舞ひ家と酒蔵を人手に渡すやうになつた時、小供心にそれが蛇の祟りであるかのやうに思つた…≫と「肥料盗人」（『青空』第二号・大正十四年二月）に書かれている。

父は忽那が小学生のときに亡くなる。母は子供をつれて神戸に出てくる。なぜこのとき神戸の地が選ばれたのかは不明である。「記憶」（『青空』第十六号・大正十五年六月）には次のように書かれる。

≪神戸のS三丁目、その町は山の手にありながら、あまり綺麗な町ではなかつたが、そこへ私たちの一家、母と兄二人と私との一家は、住ひを仮に定めた。父の死と破産とによつて、田舎から私達はそんな処へ出てきたのだつた。その時、長兄は廿二歳だつたが、私達はその兄の僅かな収入だけに頼らねばならない境遇になつてゐた。そんな家のつゝましさが私にも判つた。母は身体を悪くしてゐた。見知らぬ、怜悧さうな子供の沢山ゐる都会の小学校へ転じた九才の私にも、この新しい生活は心細いものであつた。

その私達の家は狭い露次の中にあつた。大通りから一つ折れた街から、更にも一つ折れた狭い路で、両側の長屋からそれは出来てゐた。処々に共同水道があつて女が群つてゐた。家の前には細いどぶがあり、それには板が張つてあつた。この家の構造などは却つてあまり記憶に残つてない。たゞ、あの生れた家にあつたやうな、光つた大きな柱や、重い納戸のない不思議に狭い家だと思つてゐた。

隣家にはどんな人が住んでゐたのか、たゞ向ひの家が支那人の家であつた。

「支那人と向ひ合つて住まはうとは思はなかつたねぇ」母はよくそう云つた。その家族の変つた生活振りや服装などが私を驚かした。≫

忽那は兵庫県立第一神戸中学校に進学する。こうしたきびしい家庭状況を背景においての就学であった。

「アンリの鉄砲」(『青空』第三号・大正十四年三月)では中学二年のときの憶い出が語られる。父がオランダ人、母が日本人のアンリという混血の男の子と空気銃で鳥撃ちをしたはなしである。舞台はもちろん神戸である。

大正九年九月、忽那は京都の第三高等学校文科乙類(独文)に進む。

梶井はこの頃の忽那にふれて、さきに引いた「忽那に就て」のなかで≪高等学校ではラグビーをやつてゐたことがある。応援団の中にもゐた。それでゐて画をやる。かなり多方面だ。高等学校でも大学でも独逸人には「能筆(シェーンシュライバー)」と云はれる。≫と書いている。

大正十三年三月、忽那は東京帝国大学文学部国文学科に入学する。そこで『青空』創刊にかかわることになる。忽那は『青空』には≪中谷孝雄の推薦と勧誘による≫(「珠玉の魂」昭和三十九年八月『本』)参加であったという。≪梶井も外村茂(繁)も小林馨も私には面識はあったが深い交わりはなかった。三高時代私は劇研究会のメムバーではなかったし、彼らの文学グループと交渉があったわけではない。ただ、中谷は文科乙の同クラスで親しかった。≫(同)と書く。もう一人の同人稲森宗太郎は早稲田の国文科の学生である。

『青空』創刊号（大正十四年一月）で、巻頭の梶井の「檸檬」につづいて掲載される「信」を忽那の処女作とみなしていいのだろうか。

村山信という早熟で剛情っぱりの少年が主人公。信は新井という女教師にひそかに思いを寄せるが、この女教師に近付いている鷲尾という男教師にあからさまな敵意を抱く。ある時、トランプの札と箱を鷲尾に投げつけて新井の家をとびだし、駅で鉄道自殺をはかろうとして果たせない姿を描く。この癇癖のはげしい少年にはあるいは作者の一面が投影されているのかもしれない。

「肥料盗人」（前出）には、壁一つ隔てたところで肥料を盗んでゆく者を捕えようとも、とがめようともしない「私」が、五月の月の明るい田園風景のなかに描かれる。「八月の海の上にて」（『青空』第四号・大正十四年六月）は、上京の途次、瀬戸内海を走る船上でのスケッチ。ここでも三等船室の自分の買った莫蓙に座っている無神経な若い男女を≪忌々（いまゝ）しいと云ふ感じではなしに観察し≫ている作者自身の姿がうつされる。共に作者の人柄－おおらかさ、おうようさのようなものが伝わってきて好感がもてる。

ここでちょっと寄り道になるが『青空関係書簡集』（平成四年三月に神戸親和女子大学国文学研究室の編集で非売品として刊行された『青空』同人十名の書簡集）には、淀野隆三に宛てた大正十四年九月十六日と同十五年八月十九日の日付をもつ忽那の二通の手紙が収められている。『青空』刊行に熱意を燃やしていた大学二年生、三年生のときのものだ。どちらも発信地は郷里の愛媛県温泉郡浅海村字原となっており、このたび甥にあたる忽那敏顕氏から頂いたお葉書には≪父（私の祖父）は既に亡く、兄（私の父）の所へ休暇で帰っていたのでしょう。母（私の祖母）は大正十五年二月に亡くなりましたので、叔父（忽那をさす－筆者）もお母さんの健康の事など心配されていたことでしょう。≫と書かれてあった。『青空』同人であった頃、忽那は家庭的にさびしい境遇にあったわけだ。

梶井の「忽那に就て」も次のように続く。≪情に脆く人なつこい性質とその反面の孤独――時として彼はまいま

いつぶらの様に蓋を閉じてしまふ。私は彼の印象から龍を画くことが出来そうだ。然し睛を点じることは忽那よ、それは私一人ではやれないことだ、友情を力にして、二人で睛を点じやうではないか。≫

「赤い裸婦像」(『青空』第九号・大正十五年十一月)はいかにも短篇小説らしい結構をもった作品である。銭湯の帰り、石鹸を落してそのやわらかい肌にぺたりと食い込んだ砂粒をみて堪らなく不愉快に思う癇性な主人公は、同棲している清子をモデルにして裸像を画いているのだがそれが思うように進まない。気分を変えようとして銭湯に出かけたのだがそれがこの始末だ。帰宅してふたたび絵筆をとるのだが仕事はすこしも捗らない。モデルをつとめる清子も気乗りしないようすだ。主人公は腹を立ててキャンバスの裸婦の肌を赤い絵具で塗りたくる。題名はそこから来ているのだが、やがて清子が高い熱を出していることを知り、看病しながら泪がこみあげてくるのをおぼえるという内容。カッチリとまとまった短篇だが、いま一つ筆がのびない憾みはある。

これらの作品がおおむね私小説ふうであるのに反して「村の要吉」(『青空』第十三号・大正十五年三月)は大きなスケールに発展する可能性をもった作品だ。要吉は百姓仕事がイヤでイヤでたまらない青年。要吉につれない無学な両親、よその町で恥さらしなことをして青年団から除名された義一という兄がいる。昔から家どうし仲のわるい、ちょっと「ロミオとジュリエット」を思わせるようなお君という恋人がいる。要吉は人目をはばかりながら海辺の小屋でお君と逢いびきを重ねるが、ふたりには身体の関係はない。あるとき、要吉は将来中学の先生になろうとしている従弟の昌行から、要吉の父はほんとうの父ではないという噂があると知らされる…。

多彩な人物と複雑な関係はこの何倍にも引き伸ばして書くことが出来そうな題材だ。それぞれの人物がまだ充分に書ききれてないし、はなしもトバ口で終わっているのが残念である。

「ある友人」(『青空』第二十一号・大正十五年十一月)は、嘘をついては友人から金を借りてゆき賭博に使って、あげくは盗みの罪で警察に捕えられるKという友人を、付かず離れずの位置から描いた佳作。ふるき佳き時代の学

生生活の一齣を彷彿させるところは久米正雄の「学生時代」を連想させる。

忽那はこのあと「泥―街道を漂行する或一群れに就いて―」（『青空』第二十二号・大正十五年十二月）というお遍路さんのなかのハンセン病患者の悲惨を捉えた作品を発表し、それを最後として『青空』誌上から姿を消す。終刊まぎわの第二十七号（昭和二年五月）では同人からも名前が消える。当時、忽那は神奈川県逗子にあって≪大学卒業のあてもない同棲生活でいながら、背水の陣というほどの真剣さも精進もなく、自ら省みて（略）悪い状態≫（「珠玉の魂」）であったという。

伊豆湯ヶ島温泉で療養中であった梶井は≪まだ少し間違ふと血痰が出て来たりする≫身体でありながら、このとき忽那に宛ててかなり長文の手紙を書き送っている。

≪今度の青空を見ると君の名前が削られてゐたので僕は非常にさびしい気がして淀野に訊いたら　君が削れと云つたのだと淀野は云つてゐたが、君は小林などと訳がちがふし削れと云つても削らないのがあたりまへと僕は思ふ。そして淀野にもさういふ風に云つたのだが、僕は編輯といふことに少しも手伝ひをしてゐないのだし、気強いことも云へず、一種の抗議にしかすぎなかつたがあれはさびしい気がした。

どうか生活を立てて文芸的な活動を復活してくれることを僕は願ふ。

僕も此処何年かは泥んこになつて生活しなければならないと思つてゐる。生活に圧しつぶされながら僕が勝つか悲惨が勝つかの生活を何年か続けなければならないと思つてゐる。恐らく京都で味つたやうな落魄を今度は本気で味はなければならないと思つてゐる。それは青空の大部分の人が遅かれ早かれはいつてゆく生活だ。皆同じことだ。それは選んだ道だから仕方がない。そして心を同じうする限り僕達は頼りあつてゆかなければならないと思ふ。そんな方ではさびしがらないで一生懸命に精出してくれることを祈る。≫（昭和二年五月二十三日付）

忽那は一年遅れて昭和三年三月、大学を卒業、同年五月には高知市の野村家に嫁していた姉のところに子供がな

かったところから、同家の養子となり野村吉之助を名のることとなる。これはたんなる戸籍上の入籍で共に生活したことはなかった。そして自身は前橋中学校教諭としてその地へ赴任して教育者の道を歩みはじめる。以来、群馬と教育とは忽那から切りはなせないものとなる。『青空』同人とのその後の交渉はどうだったのであろうか。梶井は昭和七年三月二十四日、鬼籍に入るが、忽那はその時どうしたのだろうか。

昭和十年からは群馬県女子師範学校教諭に転じ、同十五年からは群馬県庁の仕事にたずさわり、社会教育主事、地方視学官、学務課長などを務めている。

太平洋戦争が苛烈をきわめていた昭和十八年には陸軍司政官として、当時日本の統治下におかれていたジャワに赴いている。そこでは内務部文教局附で官立ジャカルタ男子師範学校長、ジャワ地名表記統一委員会委員などを務めるが、国策学校としてのジャワ建国大学附属の学院教授の仕事が中心であったらしい。

敗戦の翌年にあたる昭和二十一年帰国、忽那は四十五歳になっていた。いったん愛媛県の郷里に落ち着くが、旧制中学校の校長が公職追放され校長不足の折から呼び出される格好で群馬に帰り、同二十二年群馬県桐生中学校長、同二十三年からは桐生高等学校長、同三十年からは前橋高等学校長を務めている。退職後は群馬女子短大に講師として出講している。

昭和四十六年十一月、伊豆湯ケ島温泉に梶井の文学碑が建てられたさい、その除幕式に忽那は出席する。『青空』同人としてはほかに中谷孝雄、北川冬彦、清水蓼作、松村一雄が参加する。みな古希を迎える年齢になっていた。そのときのことを忽那は「回想梶井基次郎（二）」（『群女国文』二号・昭和四十七年二月）で次のように書く。

≪十二月（十一月のあやまり－筆者）二日は快晴であった。午後五時からというのだが朝の急行で前橋を発った。早目に現地に着きたかったからである。湯ケ島温泉郷というのでバスを降りたのは午後三時前であった。ここは始めてではない。しかも梶井の生存中には、彼が「是非一度来ないか」と何度も言ってくれ、「是非一度行く」と手

紙で言ってやりながら、一年半に亘る滞在療養中には、残念にも遂に訪れることのできなかった土地である。湯川屋前まで行くバスがあるとタバコ屋で教えてくれたが歩いて行くことにして、往還から渓流の方への道をひとり下ってみた。狩野川である。舗装された往還や増えた旅館のすがたなどはひどく変わっても、渓流の清澄はあまり損われていないのが何よりうれしい。梶井は、その作品以上に書簡の中で、この湯ケ島の自然がどんなにそのままで美しいか、村人がどんなに素朴で好ましいかを精細に叙べているが、いま流に沿って上って行く私の目に映る限りでは不思議なくらい荒らされていないようだ。私に、短篇「交尾」のあの描写の一節が思い浮かんだ。それは、昨夜久しぶりで全集を開いてまたそれを読んだからでもあろうが、私の最も好きな短篇の一つでもある。少々危ない思いをしながら流れまで降りた。水が美しく澄んでいて、河鹿の声はするはずもなかったが、水中のそこいらの岩の蔭に河鹿はいくらでも潜んでいそうな気がする。「河鹿をよく見てやろう」として「俺は石だぞ、俺は石だぞ」と念じて彼はじっと蹲まっている、というのだが、それはいかにも梶井らしく、じっとうずくまっている梶井の姿態と顔つきが見えるようだ。私は、自分の、今はもうこんなに皺だらけになった両手を流れにさし入れ、冷たい水を何度も掬ってみた。不覚にも涙が溢れてきた。今夜は、旧知の者がいかに梶井を「偲んで」も誰も泣くことはあるまい。「今なら肺病なんかで死ぬこともないのになあ」という哀惜の嘆きは皆の口から出るにしても、それは四十年という時を隔てての感懐にすぎぬであろう。私のこの感傷はこの流れに置いて行こう。

立ちあがって見る渓の西側の紅葉はもう盛りをすぎていた。彼の手紙に見た「浄簾の滝」というのはまだまだ上流の方ではないかと思う。封筒の裏にはいつも「伊豆湯ケ島世古の滝湯川屋」とあったから、このあたりはその名なのであろう。などと考えるうち、ふと

――ニシビラへ行けばニシビラの瑠璃、セコノタキへ来ればセコノタキノ瑠璃――

という一句が、歌かなにかのように私の唇にのぼってきた。これも「交尾」に、この鳥が自分のきまった領分に

棲んでいるという村人の話を紹介して、その領地で美しく囀るのを描いて「その頃毎日のやうに渓間を遊び恍けていた私はよくこんなことを口ずさんだ」という、その一行である。梶井基次郎でなくては書けない一句だなあとつくづく思った。≫

この除幕式には『青空』同人のほかに、梶井の実兄である梶井謙一、その他梶井ゆかりの人たち四、五十人の参加があった。このときの模様を紅野敏郎氏（当時早稲田大学教授）は次のように書く。

≪梶井基次郎その人、というよりは、私には、全「青空」関係者そのものがなんといっても大きな魅力であった。梶井のような個性的な文学者をはぐくんだ「青空」の土壌、それを私はとりわけ重視したい。従ってあの十一月二日の夜と翌三日朝の、実に多くの人びとのスピーチが私の心に強く残った。梶井や中谷夫妻を中軸とした「青空」交響楽、というふうに私には思えた。

とくに私は六人のスターチングメンバー、その一人一人について確かめたい気持を強く持っていたのだが、その一人の忽那（現在、野村姓）吉之助氏が来ておられたことがとりわけうれしかった。「青空」における忽那氏の存在は、「白樺」における園池公致氏、あるいは「奇蹟」における舟木重雄氏の位置に相当する、と私は見当をつけていた。作家としては大成されることはなかったが、その繊細な文学的感覚、おのれを律するおのずからの気品と節度、そういったものをばフルに身につけておられる点でたしかに共通性あり、とにらんでいたのだが、現在大学の教師になっておられるその忽那氏のスピーチを聞くことができて、私はあらためて同人雑誌におけるスターチングメンバーの重要性を思い知らされた。スラリとした長身の、細おもての、いかにも英国型の紳士らしい忽那氏の風貌、それから若き日をイメージしつつ、私は、創刊号にのみ歌を寄せたまま退き、のち歌人・国文学者との道を学んだが惜しくも早世した、同人中の唯一の稲門系の稲森宗太郎のことをもあわせて思い出したりもしていた。いずれも梶井や中谷氏をとりまき、ときには一瞬怖れさせもしたはずの惑星的存在であったと思う。≫（「青空交響

楽」〈『梶井基次郎文学碑』昭和四十七年一月二十日刊・梶井基次郎文学碑建設世話人会発行〉）

忽那は昭和五十七年十月二十一日、桐生市で亡くなり、同市の光明寺に葬られる。享年七十九。生涯、著書はもたなかった。

（本稿を成すにあたって愛媛県立図書館の青木日出夫氏、忽那敏顕氏、野村龍彦氏のお世話になりました。ここに誌して厚く感謝いたします。）